

安心のために知っておきたい「先進医療」の実際

毎年1月中旬頃、厚生労働省が「前年の6月30日時点で実施されていた先進医療の実績報告」を公表しています。先進医療の実際を確認するのに良い資料なので、興味を持って追いかけています。

●効果の評価中である「先進医療」

生活者のあいだで関心の高い先進医療。そもそも「先進医療」とは、健康保険法第63条第2項第3号で「厚生労働大臣が定める高度の医療技術を用いた療養その他の療養であって、保険給付の対象とすべきものであるか否かについて、適正な医療の効率的な提供を図る観点から評価を行うことが必要な療養」のことで、「評価療養」の1つに挙げられます。つまり、将来的に公的医療保険で受けられる治療として認めるかどうか、有効性・安全性を確認している段階の治療ということです。

そのため先進医療の実施にあたっては、医療技術ごとに一定の施設基準が設定されています。大学病院など施設基準を満たす医療機関では、届出により保険診療と先進医療の併用ができます。本来なら、保険診療を併用して保険診療外の医療を受けた場合には、保険診療部分にも保険給付は受けられず、全額自己負担となります。それが、先進医療部分は

全額自己負担になるものの、診察・検査・投薬など保険診療部分は健康保険でカバーされるわけです。実施する医療機関は、厚労省に定期的に実施状況を報告することが求められています。

先進医療にはAとBがあり、承認済みの医薬品や医療機器を使用する技術、未承認であっても人体への影響が極めて小さい技術は「先進医療A」、未承認の医薬品や医療機器を使用する場合など（Aより安全性が低いと考えられる）は「先進医療B」と振り分けられます。

●高額とは限らない技術料

今年の3月1日現在では109種類の先進医療技術がありますが、平成28年6月30日時点では100種類（A40種、B60種）でした。新たに申請されれば増え、認定の取り下げなどで先進医療に該当しなくなれば減ります。リストを見ても毎年大きく入れ替わっており、1年間の実施件数が全くない技術、あっても数件という技術も少なくありません（100種類のうち20種類が実施ゼロ）。実施されなければ治療効果が評価できませんから、取り下げるなどの判断が必要となります。

先進医療の技術料は全額自己負担になるため、「高額」というイメージ

が強いですが、実際には100万円を超えるような高額な技術は、平成28年6月30日時点の100種類（実施されたのは80種類）のうち14種類。一方、10万円以下のものも22種類あります。必ずしも高額というわけではありません。

●昨年4月、一部保険診療に

下表は比較的实施件数の多い技術の抜粋です。平成27年の報告では陽子線治療が3,012件、重粒子線治療は1,889件でした。いずれも減っているのは、昨年4月から一部保険診療となったからです（陽子線治療は小児がん、重粒子線治療は手術による切除が難しい骨軟部腫瘍のみ）。これらを含め、同時に14種類の先進医療が健康保険対象の医療となっています。

こうしてみると、現時点では先進医療であっても、将来は保険診療になる可能性があるかと期待できます。たとえば、白内障の手術である「多焦点眼内レンズを用いた水晶体再建術」は年間実施件数も実施医療機関数も増えており、保険導入への期待が持てる技術のひとつでしょう。

先進医療にかかる費用をカバーする保険への関心は高く、保険料も100円程度とリーズナブル。付けておくと安心ですが、先進医療の実際について知っておくとさらに安心です。

(クルー 浅田里花)

【平成28年6月30日時点で実施されていた先進医療の例（上6段は先進医療A、下2段は先進医療B）】

技術名	平均入院期間 (日)	年間実施件数 (件)	1件当たりの 先進医療費用(円)	実施 医療機関数
陽子線治療	8.8	2,016	2,760,022	9
重粒子線治療	9.8	1,787	3,093,057	5
歯周外科治療におけるバイオ・リジェネレーション法	—	277	64,629	18
EBウイルス感染症迅速診断(リアルタイムPCR法)	44.6	234	15,761	6
多焦点眼内レンズを用いた水晶体再建術	1.2	11,478	554,707	459
前眼部三次元画像解析	0.4	6,739	3,662	86
ペムトレキセド静脈内投与及びシスプラチン静脈内投与の併用療法	27.5	102	1,175,579	42
内視鏡下手術用ロボットを用いた腹腔鏡下胃切除術	15.1	172	1,058,832	8